

ロジックモデルを用いた CBO による HIV 啓発活動のプロセス評価

研究分担者：本間隆之（山梨県立大学看護学部 講師）

研究協力者：後藤大輔、町登志雄、中村文昭（財団法人エイズ予防財団/MASH 大阪）、岳中美江

研究要旨

協力が得られた大阪の CBO との関係を構築しつつ、コミュニティセンターとしての「コミュニティスペース dista」に関するプログラム評価ワークショップを行い、参加者によるロジックモデル構築を試行した。複雑なコンセプトを持つ HIV 予防介入プログラムの理論とプロセスを明確にするという目的において、関係者間で協議しながら記述していくロジックモデルは最適なツールと考えられる。しかし、ロジックモデルの作成方法、表現方法及び活用方法にはさらなる独自の工夫を要する。また、エンパワメント評価の立場からは、ロジックモデルの構築過程の議論や参加者の考えの変化、あるいは行動の変化が評価研究の成果の重要な一部であるため、これを適切に記述できるように内容の記録や参加者の振り返りを記録していく必要がある。さらに、CBO が行っている複数のプログラムは相互に補完しあいながら機能していると考えられるため、関係する他のプログラムのモデルを並行して構築し評価することによって、関係性と役割が明確になると考える。

A. 研究背景及び目的

1. プログラム評価

Community Based Organization (CBO) による各コミュニティの文化に根差した HIV 予防啓発活動は、一つの活動に複数の多様な目的を含んでいるとともに、当該コミュニティへの親和性が高いと考えられるパッケージとして実施されているため、実験介入のようにシンプルに評価することが難しい。HIV 予防啓発のプログラム内に体系的な評価を含んで実施している例は少なく、外部者などによる体系的な評価を支援していく必要がある [Painter, 2010]。

プログラムの体系的な評価には、一般的にプロセス、アウトカム、コスト、比較優位性、一般化可能性という価値側面があり、これらを統合した評価視点として妥当性、有効性、効率性、持続可能性がある [安田&渡辺, 2008] [安田, 2011]。(財務省「政策評価に関する基本計画;平成 22 年一部改訂」では必要性、効率性、有効性、公平性、優先性としている)。

時にそういったコンセプトは担当者の交代や時間の経過とともに薄まっていくことがあり、関係者が個々に持つ表現されていないプログラムに関する認知を具体化し共有することは、プログラムの継続的運営に重要な意味を持つ [PH Rossi, 2005]。また、一般化による他地域での応用や適切な活動評価を行うためには、プログラム内で CBO が行っている活動とその期待される結果が明示されたプロセスを記述したうえで、体系的な評価を構築する必要がある [PH Rossi, 2005]。

2. ロジックモデル

米国ワシントンの政策シンクタンク Urban Institute の J. S. Wholey が 1979 年に記述して以来、プログラム企画、実施、評価を行うためのツールとして、経済や政策評価の分野で使われてきた [Wholey, 1979] [Bickman, 1987] [Chen&Rossie, 1983]。ロジックモデルはリソースと活動、期待される結果及びプログラムに潜在的に含まれる理論を、マップのように視覚的に表現する手法である

[W. K. Kellogg Foundation, 2001] [United Way of America, 1996]。コミュニティ参加による主体的取り組みによってロジックモデルはよりコミュニティにとって活用可能なものになると言われている [SA Kaplan, 2005]。

3. ロジックモデルの活用

行政レベルでは米国会計監査院 US General Accounting Office、イギリスの National audit office、カナダ Treasury board secretariat Canadaなどでプログラム評価実施マニュアルにおいて、ロジックモデルの概念、活用方法等の説明がある。また、非営利組織では、米国の W. K. Kellogg Foundation や United Way はロジックモデルを活用するためのガイドを作成し、助成金の申請に要する計画書に含めることとしている。

HIV/STD 予防の分野においても米国 CDC や米国心理学協会 (American Psychological Association) において、ガイドラインや書籍の中で、HIV 予防プログラムの評価手法としてロジックモデルの使用を紹介している [Chen, 2005] [CDC, Evaluating CDC-Funded Health Department HIV Prevention Programs, 2007] [CDC, Evaluation Guidance Handbook: Strategies for Implementing the Evaluation Guidance for CDC-Funded HIV Prevention Programs, 2002] [Aral SO, 2008]。

CBO によって行われているプログラムのセオリー評価についてロジックモデルを用いて記述することにより期待される効果は以下の5点である。

- 1) 作成過程で議論することにより、CBO スタッフ及びボランティアなどのプログラム関係者が個々に考えている活動の目的や期待する成果について、整理することができる。
- 2) 問題の発見や課題の整理、プログラム見直しの方向性などを考える際のツールとなる。
- 3) 新しく活動に参加しようとするボランティアや同様の活動を行おうと考えている他地域の CBO あるいは行政や出資者等に、プログラムを説明するためのツールになる。
- 4) 世代や主要メンバーが交代してもプログラムの目標を維持していくことができる記録

となる。

- 5) 活動の効率や効果などのインパクト評価を行うための適切な指標（調査項目）を設定する際の根拠資料となる。

本研究では、HIV 予防啓発活動を行っている CBO において核となるプログラムセオリー及びプロセスに関して、ロジックモデルを用いた評価方法を検討することである。

B. 研究方法

本年度は近畿地域において活動する CBO である MASH 大阪の協力を得て、コミュニティセンターとしての「コミュニティスペース dista (以下、dista)」の運営に関するプログラム評価（ロジックモデルの作成）を行なった。ロジックモデル作成に際しては、スタッフ内の現行活動に関する理解の共有と整理を意識したワークショップの運営を心掛けた。

CBO のミッション及び個別プログラムの目標と活動内容をワークショップ形式の討議により議論した。研究者が参加した3回に加えて、CBO スタッフ内での随時複数回の討議を通して、CBO スタッフ自身でロジックモデルを作成した。

第1回ワークショップでは、コミュニティセンターとしての dista の背景となる状況及び現在認識している課題を共有し整理した。主に来場者数の減少、スタッフのマネジメント等が課題として挙がっていたが、表面的な課題にとらわれず、コミュニティセンターとしての dista の目標や現状を整理するように求めた。

第2回ワークショップでは、コミュニティセンターとしての dista の対象の一部として考えられていた「ふらっと来る人」について注目し、具体化しモデルの作成を進めた。

第3回ワークショップでは、必要性、対象、期待する変化などの視点から整理し、モデルに反映した。

その後、メール等でのやり取りを通して、詳細の修正を加えた。なお、スタッフ間で検討する時間を作るように依頼し、ロジックモデルで気になる点は議論や修正をすることを勧めた。

回数	内容
1回目	コミュニティセンターとしての dista の目標を書き出し再確認した。現状として近年の状況の変化や現在プログラムに至る経緯などについて確認した。課題としては主に来場者数の減少、スタッフのマネジメント等が挙げられた。
2回目	コミュニティセンターとしての dista の対象者が不明瞭であったため、具体的にしよう勧めた。ロジックモデルに起こし、内容について議論した。
3回目	コミュニティセンターとしての dista の目標を達成するために必要となる対象の状況について検討した。それらを戦略的課題(中長期目標)としてロジックモデルの作成を開始した。dista で提供している内容を整理して書き出した。

C. 研究結果

コミュニティセンターとしての dista のロジックモデルを図1に示す。なお、本報告において提示するモデルは最終版ではなく、CBOにより適宜更新されていく中間段階のものである。

dista を運営する MASH 大阪の最終的な目的は近畿地域における MSM のセクシュアルヘルスの向上である。その目的達成のために、HIV が特別と思わなくなる、コミュニティで HIV/STI の話題を話すことができるようになる、自分で考えて情報を求め得る、自分で考えて検査を受検する、自分で考えて相談する、医療や検査相談などの社会資源が身近になり利用できる、コンドームを使う、自分らしく居られる場所があることが必要であるという考えのもとに、dista を運営していることが明確になった。MASH 大阪はこれらの課題を達成するために、dista という場において信頼関係のもとに情報の整理と設置、人の配置、勉強会等の運営を行っていた。

また、これまで明確でなかった「ふらっと来る人」に関してもワークショップの中で言及し、誰か知り合い(スタッフ含)がいるか見に来る、休憩場所として立ち寄る、バーに行くまでの時間つぶし、待ち合わせ・待ち合わせまでの時間つぶし、誰か人がいるところにいたい、行くところがない、何かやりたいけどどうしていいかわからないといった様々

な理由で気軽に立ち寄る人にとって、普通にそこにあるものとして HIV/STI の情報等を提示していることが明確になった。

D. 考察

ワークショップを行い、CBO としての目的をスタッフ間で話し合い共有するとともに、プログラムプロセスと目的についてロジックモデルを用いて整理した。スタッフ間で話し合い、これまでの活動の振り返りや現状の整理、課題の検討、将来の活動についての議論を行うことができた。

当該コミュニティセンターは従来、何でもない場所に様々な情報を置くことをコンセプトの一つとしていたため、これまで、意図的に何の場なのかを表明せずいた。また、コミュニティセンターの対象は“コミュニティセンターに来る可能性がある人、来てほしい人”として、ロジックモデルが作られている。コミュニティセンターが日常的な交流の場として対象者が認知して利用することによって、はじめて効果的に機能するプログラムプロセスであることがわかる。アウトカム及びインパクト評価の指標としては、dista の認知とどういった場所として認知されているかについて評価を行っていく必要が示唆された。また、現在の課題として挙げられていた「来場者を増やす」ということが今後取り組むべき課題であるとすれば、どういった人に来てもらうか、そのためにどういったアピールを行うかなどの具体的な方略を考えていくうえで、従来のコンセプトについて再度理解と議論が必要となることが考えられる。

プログラムのコンセプトと実際の活動がどのようにリンクしているかについて理解する上で、図示によって記述するロジックモデルは有用であったと考えられる。なお、十分に記述しきれない部分もあると考えられるため、効果的なワークショップの方法や作業の手順について更なる検討と改善が必要と考えられる。最終的には、CBO 自身がロジックモデルを活用してプログラムの運営や発表に活用できるよう工夫し、改善していく必要がある。

E. 結語

複雑なコンセプトを持つ HIV 予防介入プログラムの理論とプロセスを明らかにするために、関係者間で協議しながら記述していくロジックモデルは最適なツールと考えられる。しかし、先行研究にはここまで詳細かつ複層的なモデルの構築や活用事例の報告がないため、作成方法、表現方法及び活用方法にはさらに独自の工夫を要する。また、エンパワメント評価の立場からは、ロジックモデルの構築過程の議論や参加者の考えの変化あるいはその後の行動の変化が評価研究の成果の重要な一部であるとされるため [Fitterman, MD, 2005]、これらを適切に記述することができるよう、討議の内容や参加者の振り返りを記録していく必要がある。

また、複数のプログラムが相互に補完しあいながら機能していると考えられるため、関係する他のプログラムのモデルを並行して構築し評価することによって、関係性と役割が明確になると考えられる。

HIV 予防に効果のある対策を進めていく上で、CBO による HIV 予防啓発プログラムのセオリー、プロセスを明確にすることにより、プログラムの意図や効果を適切に測定するアウトカム（インパクト）指標の考案を行い、評価を行っていく必要がある。

F. 発表論文等

1. 日高庸晴, 本間隆之: インターネットによる MSM の行動疫学調査-経年変化分析の結果-, 第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京, 2011

参考文献

- Aral SO. (2008). Behavioral intervention for prevention and control of STD. Springer.
- Bickman L. (1987). The function of program theory using program theory in evaluation. San Francisco: Jossey-Bass.
- CDC. (2002). 参照先: Evaluation Guidance Handbook: Strategies for Implementing the Evaluation Guidance

for CDC-Funded HIV Prevention Programs: http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/strat-handbook/pdf/guidance.pdf

- CDC. (2007). 参照先: Evaluating CDC-Funded Health Department HIV Prevention Programs: http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/
- Chapel J. Thomas. (2008). From Data to Action: Integrating Program Evaluation and Program Improvement. 著: Aral O. Sevgi, Douglas M. (Eds.) John, Behavioral intervention for prevention and control of STD (ページ: 466-481). Springer, 2008.
- Chen & Rossie. (1983). Evaluating with sense: the theory driven approach. Evaluation review, 283-302.
- Chen H. (2005). Practical program evaluation: Assessing and improving planning implementation and effectiveness. Thousand Oak, CA: Sage.
- HT Chen. (2002). Designing and conducting participatory outcome evaluation of community-based organizations' HIV prevention Program. Aids education and prevention, 18-26.
- J S Wholey. (2010). Handbook of Practical Program Evaluation, 3ed. Jossey-Bass.
- Knowlton WL. (2009). The logic model guide book; Better strategies for great results.
- Painter TM. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev. Oct;22(5), 387-401.
- PH Rossi 大島巖(監訳). (2005). プログラム評価の理論と方法: システムティックな対人サービス政策評価の実践ガイド. 東京: 日本評論社.
- SA Kaplan. (2005). The use of logic models by community-based initiatives.

Evaluation and Program Planning, 167-72.

- SmithMF. (1989). Evaluability assessment: A practical approach. Norwell, MA: Academic publishers.
- TMPainter. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev. Oct;22(5), 387-401.
- United Way of America. (1996). Mesuring

program outcome: A practical approach.

- W. K. Kellogg Foundation. (2001). The logic model development guide.
- WholeyJS. (1979). Evaluation: promise and performance,. The urban institute.
- 安田&渡辺. (2008). プログラム評価研究の方法(臨床心理学研究法 第7巻). 東京: 新曜社.
- 安田節之. (2011). プログラム評価;対人・コミュニティ援助の質を高めるために. 東京: 新曜社.

図 1. MASH 大阪コミュニティセンター事業のロジックモデル (暫定版)

